

日本語と韓国語における呼称選択の適切性

著者	林 ？情，玉岡 賀津雄，深見 兼孝
雑誌名	日本語科学
巻	11
ページ	31-54
発行年	2002-04
URL	http://doi.org/10.15084/00002076

日本語と韓国語における呼称選択の適切性

林 炫 情

(広島大学国際協力研究科)

玉 岡 賀 津 雄

(広島大学留学生センター)

深 見 兼 孝

(広島大学留学生センター)

キーワード

呼称, 適切性, テクノニミー, 年功序列, 日本語と韓国語

要 旨

日本語と韓国語の呼称選択における適切性判断について、日本人154名と韓国人184名に質問紙調査を行ったところ、次のことが明らかとなった。(1) 日本人と韓国人においては、上下関係が呼称選択に大きな影響を持っている点は共通である。しかし、韓国人に比べ、日本人は、兄・姉に対する名前の使用に関して寛容である。(2) 子供を起点にしたテクノニミー (teknonymy) は、日韓において、子供の名前、配偶者の姻族の呼び方など条件によって微妙な違いが見られた。(3) 親族名称の虚構的用法において、年下の人、とりわけ初対面の小学生を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼ぶことに対して、韓国人は日本人に比べるとかなり抵抗を感じている。(4) 両言語の「一君」と「先生」は日韓で同じ漢字で表記されるが、「一君」と「先生」の使用に関する適切性判断の日韓差は呼びかける相手が誰かによって、その違いが見られた。(5) 年齢の低いグループより年齢の高いグループのほうが、また男性より女性のほうが呼称の使い分けにやや敏感である。

1. はじめに

日本語と韓国語では、自分および相手を指したり呼びかけたりする場合、発話者と聞き手との社会的関係、性別、場面などの違いによって、人称代名詞、地位・役職名、職業・役割名、親族名称、個人名、敬称など、多彩なバリエーションの中から呼称を選択することができる。従来の日韓両言語の呼称に関する研究は、敬語の体系のなかでの記述や発話者の言語運用面からの実態調査が主であり、その使われ方が日本人内部および韓国人内部にどのように受け止められているかについてはほとんど議論されていない。しかし、両言語の呼称選択のルールを考えるに当たっては、発話場面で用いられる呼称が日本人および韓国人にどのように受け止められているかを理解することが重要な決め手になるといえよう。そこで、本研究では、日韓両言語のコミュニケーション活動における呼称の使い分けを適切性という観点から、日本人と韓国人の間に違いがあるかどうか、また年齢、男女に違いがあるかどうかについて検討することにした。

2. 日本語と韓国語における呼称の使い分けの実態

日本語と韓国語の共通点として次のことが言える。まず、日本語の呼称についての先行研究として、鈴木(1973)は、自称詞（自分自身に言及することばの総称）と対称詞（話し相手に言及することばの総称）という概念を用い、日本語の親族間の自称詞と対称詞の使い分けには、「目上」と「目下」という対立概念を基本とした以下のような原則があると記している。(1) 目上の親族に対しては、人称代名詞または名前で直接呼びかけることはできないが、目下の親族に対してはできる。(2) 目上の親族に対しては、親族名称で呼びかけるが、目下の親族を親族名称で呼びかけることはできない。(3) 目上の親族に対しては自分を「良子は」のように名前で言うことができる（若い女性）が、目下の親族に対してはできない。(4) 目下の親族に対しては「お母さんは」のように相手から見た親族名称で自分を言及することはできるが、目上の親族に対してはできない。また、この親族内における使い分けの原則は、親族関係以外にもほとんどそのまま拡張されると指摘している¹。

これらの日本語に関する使い分けの原則は、おおむね韓国語に当てはめることができる(林, 1998)。つまり、第1の共通点として、日・韓両言語は、上下の人間関係が呼称選択において大きな意味を持っており、それによって親族名称、地位・役職名、人称代名詞などの使用が規定されると言えよう。第2の共通点として、日本語と韓国語は、親族名称が親族以外の人間関係にも拡張して使われる点があげられる。例えば、両言語では、道で会った中年の女性に「おばさん/ajumeoni」（左が日本語、右が韓国語、以下この形式に従う）と親族名称で呼びかけることができるなど、実際には血縁関係のない他人に対しても親族名称を使って呼びかけることができる。第3の共通点として、家族内の年少者へ視点を移動して相手を呼びかけたり、自分のことを言及したりすることができる点があげられる。すなわち、日本語と韓国語では、夫を「パパ/appa」と呼びかけたり、子供に対して自分を「お母さん/eomma がやってあげる」などと子供の視点からいうことができる。

このように一見非常に類似しているように見える日本語と韓国語の呼称体系ではあるが、実際の使用においては微妙な違いがみられる。まず、両言語では、兄・姉に対しては親族名称を用いるのが一般的であるが、日本語では韓国語に比べ、名前も頻繁に用いられているようである。日韓の大学生における呼称使用の実態調査(洪, 1997)では、日本人の場合、男性の17.2%、女性の19.3%が兄や姉を名前で呼びかけると答えている。これに対し、韓国人の場合、男性は1.4%、女性は3.4%のみが兄・姉を名前で呼びかけると答えている。そして、10代から60代までの日本人126名と韓国人160名を対象とした調査(林, 2001)では、兄・姉を名前で呼びかけると答えている日本人は、男性が14.3%、女性が17.1%であった。それに対し、韓国人は、男性の3.1%が兄に対してのみ名前を呼称として用いていると答えており、その他のケースでは名前を使用しないという結果が得られた。さらに、日本の小学生から大学生478名のきょうだいに対する呼称を調べた柿崎睦子の調査(荻野, 1998)によると、弟から兄に対しては10.5%、妹から姉に対しては8.5%が対称詞として名前を用いるという結果が得られた。柿崎の調査結果は、先述の2つの調査に比べるとその使用率が低いが、それでも10%前後の使用率を示し、韓国人の結果と比較すると高い。

一方、弟・妹には両言語とも名前で呼びかけるのが一般的である(林, 2001)が、韓国語では、ひとたび弟や妹が成人したり、あるいは彼ら・彼女らに子供が生まれると、名前で呼びつづけるのは一種の侮辱と考えられるため、名前で呼ぶのを避けようとする傾向がみられる(Lee & Harvey, 1973)。そして、名前の代わりに、親族名称である「dongsaeng」、つまり日本語では「弟」と「妹」を総称した言い方が使われたり、「○○abeoji(○○のお父さん)」、「○○eomeoni(○○のお母さん)」などといったテクノニミー (teknonymy)²が見られるようになる。さらに、韓国語では、姻族(姻戚関係の親族)に対しても疎遠な感じがする姻族用語を避けるためにテクノニミーが用いられる場合がある(Lee & Harvey, 1973)。これに対し、日本語では、弟・妹が成人した場合にも名前で呼び続ける。また姻族に対しては、親族名称や「名前+さん」で呼びかけるのが一般的であろう。

ところで、子供を起点にしたテクノニミーの使用においても、日本語と韓国語では違いが見られる。日本語では、妻が夫のことを子供の視点から「パパ」と呼ぶことがある。鈴木(1973)は、この呼称選択について、他者である子供に自己を心理的に同一化 (empathetic identification) して、夫に話しかけていると説明している。さらに、鈴木は、親族名称が「誰々の」といった所有格形の修飾語をとまわずに使われるということに日本語の特徴があると指摘している³。しかし、韓国語の場合は子供の名前を省略しない点で日本語と異なっている。韓国語では、日本語のように単に「お父さん」というのではなく、「子供の名前+abeoji」あるいは「子供の名前+appa」といった語形で、「○○(の)お父さん」と呼ぶのが普通である(장, 1997)⁴。このように日本語と韓国語ではテクノニミーに微妙な使い方の違いがあり、それによって相手国の呼称について日本人と韓国人の受け止め方もずいぶん異なることが予想される。

また、非親族の人に対する親族名称の使用においても日韓両言語では違いが見られる。林(2001)の調査によると、韓国人は、自分より年上の人、先輩、友達の兄・姉、兄・姉の友達、近所の年上の仲間などと話す際、名前よりも親族名称で呼ぶことが多い。例えば、年下の男性から年上の男性に対しては「hyeong」、年下の女性から年上の男性に対しては「oppa」、年下の男性から年上の女性に対しては「nuna」、年下の女性から年上の女性に対しては「eonni」などと親族名称で呼びかけることが多い(男性が70.0%、女性が53.4%)。しかし、日本人は、年上の仲間や知人に対してごくわずかに親族名称をもちいるに留まっており(男性が5.1%、女性が4.0%)、名前やニックネームで呼びかけるのが一般的である(男性が89.1%、女性が83.3%)。

さらに、日韓で同じ漢字で表記される「一君」「学生」「先生」などは、現在の日本語と韓国語においてはその使用法において違いが見られる。とりわけ、韓国語の「一gun/一君」が、先生が児童を呼ぶとき、年配者が若輩を呼ぶときといった、年齢や世代を規準とした絶対的上下関係を軸に使われているのに対し、日本語の「一君」は、上から下の関係ばかりではなく、同年輩でも使われており、その使われ方は韓国語の「一gun」よりも広い(任・井出, 2000)ことが指摘されている。

以上のように、日本語と韓国語の呼称選択には微妙な違いがみられる。そこで、本研究では、社会的な上下関係を持つ就労者に焦点を絞り、日韓両言語の呼称選択の適切性についての質問紙

調査の結果から、日本語と韓国語の呼称の類似点と相違点を詳細に明らかにする。

3. 調査方法

3.1. 調査時期と被験者

調査は2001年2月3日から3月27日までの期間に行った。今回の調査では、調査に十分な費用と時間をかけることが困難であったため、地域を広島県とソウル特別市に限定した。また、両国の被験者の年齢と職業の違いからくることばのゆれを少なくするため、被験者の選択にあたって、職業および年齢についても統制した。まず、職場での呼称選択の適切性について調査するため、職業は公務員および会社員に、さらに、年齢は25歳から45歳までに限った。この年齢に限定したのは、社会的に活躍している年齢層のなかで、ちょうど中間層にあたり、上下の人間関係のなかで、ことばの使い分けを日常的に最も注意して使用する年齢であると考えたからである。被験者は日本人話者が154名で、韓国人話者が184名の合計338名である。男女別の内訳は、日本人の男性が79名、女性が75名、韓国人の男性が104名、女性が80名であった。年齢は、日本人の平均が34歳2ヶ月（標準偏差は6年8ヶ月）、韓国人の平均が32歳6ヶ月（標準偏差は4年9ヶ月）であり、平均でみるとかなり近い年齢層である。日本人と韓国人を合わせて男女別にみると、女性の平均が32歳1ヶ月（標準偏差は5年8ヶ月）、男性の平均が34歳4ヶ月（標準偏差は5年8ヶ月）であった。年齢について、25歳から29歳まで、30歳から34歳まで、35歳から45歳まで⁵の3つのグループに分類して、分散分析を行った。それぞれのグループの人数は、日本人被験者が、25歳から29歳までが53名、30歳から34歳までが33名、35歳から45歳までが68名である。一方、韓国人被験者は、25歳から29歳までが58名、30歳から34歳までが63名、35歳から45歳までが63名である。国別、性別、年齢層別の被験者数の詳細は、表1に示したとおりである。

表1 被験者の国別、性別および年齢層別の人数

国 名	性	年 齢 層			合 計
		25 歳～29 歳	30 歳～34 歳	35 歳～45 歳	
日 本	女 性	20	13	42	75
	男 性	33	20	26	79
韓 国	女 性	35	25	20	80
	男 性	23	38	43	104
合 計		111	96	131	338

注：数値の単位は人。

3.2. 質問紙と測定尺度

本調査では、日本語と韓国語の呼称選択における類似点と相違点が測定できると予想される対話場面を想定し、21種類の質問項目を作成した。質問項目で取り上げた呼称表現はいずれも日本語と韓国語の両言語において存在するものである。従って、これらの表現に関する適不適の判断は「表現自体はあるけれども、この相手に向かって（あるいはこの場面で）いうのは適切だ／不

適切だ」という判断である。質問紙では、両言語における呼称の使い分けの特徴と規則性から、やや不適切であると考えられそうな項目を多く並べて質問し、日本人と韓国人とがどの程度否定的な反応を示すかを考察した。調査票では、自称詞に関するものを4項目、対称詞に関するものを17項目取り上げた。そして、これら21項目のそれぞれの場面での呼称使用について、適切であるかどうかを段階尺度により被験者に尋ねた。以下、これを「適切度」と呼ぶ。呼称使用に関する被験者の適切度は、「全く適切でない」を-2点、「あまり適切でない」を-1点、「どちらともいえない」を0点、「ある程度適切である」を1点、「非常に適切である」を2点とし、5段階尺度で測定した。配点を-2から2までの連続変数にすることで、適切であるかどうかの判断がマイナスであれば否定的、プラスであれば肯定的であるという一般的指標としても使える。質問文の詳細は末尾に示す。なお、紙面の都合上日本語のみを示すことにする。

4. 分析と結果

本研究では、被験者間変数を3つ設定した。まず、本研究の主要目的である日韓差については日本人と韓国人の2グループ、年齢層差については25歳から29歳まで、30歳から34歳まで、35歳から45歳までの3グループ、性差については男性と女性の2グループとした。そして、2(日韓差)×3(年齢層差)×2(性差)の分散分析をそれぞれの質問項目について行った。以下では、自称詞および対称詞に分けて、日韓差、年齢層差および性差の3つの観点から分析し、結果を検討する。

4.1. 自称詞選択における日韓の適切性判断の違い

自称詞に関する項目については4つの場面を想定した。

第1場面は、大人が自分のことを「〇〇は」など、自分の名前で指すことに対する適切性判断である。上述の分散分析の結果、日韓差 $[F(1,326)=32.00, p<.0001]$ ⁶ および性差 $[F(1,326)=6.30, p<.05]$ に有意な主効果がみられた。全体的にみると、日本人も韓国人も適切でないと判断する傾向が見られるが、適切さの度合いからすると、韓国人($M=-0.25$; M は平均を示す)よりも日本人($M=-1.06$)のほうがかなり否定的に判断している⁷。また、男性と女性では、女性($M=-0.82$)の方が、男性($M=-0.53$)よりも若干不適切であると考えているようである。また、日韓差・性差・年齢層差 $[F(2,326)=4.10, p<.05]$ の3変数の間に有意な交互作用が見られた。この結果は、これら3つの変数の各々が影響していることを示している。最も否定的であったのは、30歳から34歳までの日本人男性($M=-1.31$)であり、最も寛容であったのは、30歳から34歳までの韓国人男性($M=0.13$)であった。これについては、日本と韓国で対照的な結果が見られた。これらの違いが有意な交互作用を生み出したのであろう。

第2場面は、会社の課長が部下に自分のことを「課長は」と言及することに対する適切性判断である。上述の2×3×2の分散分析を行った結果、日韓差 $[F(1,324)=14.80, p<.0001]$ および性差 $[F(1,324)=9.69, p<.01]$ に主効果が見られた。目下に対して自分自身を地位・役職名で言及することについて、韓国人($M=-1.12$)よりも日本人($M=-1.52$)のほうが不適切であると判断する傾向が若干強かった。さらに、男性と女性では、女性($M=-1.50$)のほうが男性($M=-1.20$)

より若干不適切であると感じる傾向が強かった。またここでは日韓差と性差 $[F(1,324)=10.40, p<.001]$ の交互作用が有意であり、日本人男性($M=-1.54$)と韓国人男性($M=-0.86$)とに大きな違いが見られた。自分を地位・役職名で言うことに対して日本人男性はかなりの抵抗を感じるようである。

第3場面は、中年のおじさんが自分のことを「おじさん・おじちゃん/ajeossi」と言及することに対する適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 $[F(1,322)=9.88, p<.01]$ の主効果のみが有意で、韓国人($M=-0.18$)と比較すると日本人($M=0.15$)は不適切であるとは感じないようである。さらに、日韓差と年齢層差の交互作用 $[F(2,322)=5.30, p<.01]$ が有意であり、最も適切度が高かったのは日本人の25歳から29歳までのグループ($M=0.36$)であった。また、適切度が最も低かったのは韓国人の30歳から34歳までのグループ($M=-0.45$)であった。つまり、年齢階梯語⁸として親族名称を用いて自分を言及することは、日本人より韓国人、特に30歳から34歳までの人には適切であるとは判断されないようである。

表2 日・韓の自称詞使用に関する質問事項目の平均と標準偏差

場面	質問項目	韓 国 人						日 本 人					
		女 性			男 性			女 性			男 性		
		25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳
1	大人が自分のことを「〇〇は」など、自分の名前と言います。	-0.31 (1.28)	-0.68 (1.18)	-0.80 (1.28)	-0.17 (1.15)	0.13 (1.07)	-0.07 (1.35)	-1.27 (0.84)	-0.90 (1.02)	-1.08 (0.98)	-0.60 (1.14)	-1.31 (0.63)	-1.10 (0.93)
2	会社の課長が部下に自分のことを「課長は」と言います。	-1.20 (0.87)	-1.40 (0.87)	-1.80 (0.41)	-0.07 (0.97)	-0.97 (0.87)	-0.90 (1.12)	-1.36 (0.86)	-1.60 (0.68)	-1.62 (0.57)	-1.65 (0.59)	-1.46 (0.52)	-1.50 (0.80)
3	中年のおじさんが自分のことを「おじさん・おじちゃん」と言います。	-0.09 (1.38)	-0.54 (1.28)	0.05 (1.57)	-0.48 (1.20)	-0.37 (1.08)	0.16 (1.29)	0.27 (0.84)	0.10 (0.97)	-0.15 (1.08)	0.30 (0.66)	0.62 (0.87)	0.05 (0.80)
4	自分の会社の社長に自分のことを「おれは」と言います。	-1.40 (1.14)	-1.52 (0.92)	-1.80 (0.70)	-1.55 (0.60)	-1.05 (1.16)	-1.44 (0.85)	-1.73 (0.52)	-1.65 (0.59)	-1.85 (0.37)	-1.65 (0.67)	-1.54 (0.78)	-1.71 (0.60)

注：括弧内は標準偏差。数値は、2から-2までの変数である。網かけした部分は、呼称の使用に関してマイナス指標を示す。

第4場面は、自分の会社の社長に自分のことを「おれは/naneun」⁹と言及することに対する適切性判断である。分散分析の結果、主効果が見られたのは、日韓差 $[F(1,325)=5.96, p<.05]$ のみで、年齢層差、性差には有意な違いが見られなかった。目上の人に対して「おれは/naneun」といった敬度が低い人称代名詞を用いることについて、日本人($M=-1.71$)も韓国人($M=-1.42$)もかなり不適切であると判断しているが、韓国人よりも日本人のほうが一層強く感じるようである。

以上の4つの場面での自称詞選択における適切性判断ではすべての場面で日韓差は一貫して有意な主効果を示した。しかし、年齢層差には主効果が見られなかったもので、年齢による影響はあまりないようである。場面1と場面2、および場面4においては、日本人も韓国人も不適切であるという判断に傾く点では共通している。しかし、これらの場面についての適切度においては韓国人よりも日本人のほうがより否定的であった。日韓差で最も有意な差が見られたのは場面3である。中年の男性が自分のことを年齢階梯語である「おじさん・おじちゃん/ajeossi」と呼ぶことについては、日本人よりも韓国人のほうが抵抗を感じるようである。最も否定的であったのは韓国の30歳から34歳までのグループであった。また、場面1と場面2では性差に有意な主効果がみ

られ、若干の差ではあるが女性のほうが男性よりも否定的に受け止めていた。とりわけ、日韓と性差の交互作用が認められた場面2においては、日本人男性が最も否定的に判断していた。

4.2. 対称詞選択における日韓の適切性判断の違い

対称詞に関する項目については、対称詞が使われる状況を3つに分けて調査した。第1は、親族内での対称詞の使用状況で6つの場面からなる。第2は、職場での対称詞使用で6つの場面からなる。そして、第3は、その他の場面での対称詞使用で5つの場面からなる。以下、それぞれの対称詞の使用状況について、場面ごとに分析していく。

4.2.1. 親族内での対称詞選択における日韓の適切性判断の違い

親族内の対称詞に関する項目については6つの場面を想定した。

第1場面は、大人が自分の親を「〇〇さん、〇〇ちゃん/〇〇ssi(氏)」などと名前または愛称で呼ぶことについての適切性判断である。分散分析の結果では、日韓差 $[F(1,325)=27.77, p<.0001]$ および年齢層差 $[F(2,325)=7.69, p<.001]$ に有意な主効果が見られた。両変数の交互作用は有意ではなかったもので、日韓差と年齢層差がそれぞれ独立して対称詞選択に影響していることを示している。したがって、両変数を別々に検討する。まず、日韓差をみると、日本人($M=-0.90$)よりも韓国人($M=-1.46$)のほうが不適切であると感じる傾向がみられた。また、年齢による多重比較(Games-Howell法)の結果をみると、25歳から29歳までのグループ($M=-0.92$)と35歳から45歳までのグループ($M=-1.44$)との間に有意な違いがあった。自分の親に対して名前では呼びかけることについては、日本人も韓国人も適切ではないと感じるようであるが、この傾向は35歳から45歳までのグループにより強く見られた。

表3 日・韓の親族内での対称詞使用に関する質問事項の平均と標準偏差

場面	質問項目	韓国人(平均と標準偏差)						日本人(平均と標準偏差)					
		女性			男性			女性			男性		
		25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳
1	大人が自分の親を「〇〇さん、〇〇ちゃん」などと名前または愛称で呼びます。	-1.34 (1.03)	-1.56 (0.71)	-1.95 (0.23)	-1.13 (0.97)	-1.34 (0.97)	-1.56 (0.77)	-0.61 (1.20)	-0.80 (1.15)	-1.12 (1.03)	-0.60 (1.43)	-1.00 (1.00)	-1.14 (0.98)
2	大人が自分の親を「あなた」と呼びます。	-0.86 (1.12)	-0.88 (1.54)	-1.25 (1.33)	-0.57 (1.34)	-0.74 (1.22)	-1.09 (1.32)	-1.03 (0.92)	-1.05 (1.00)	-1.35 (0.85)	-1.20 (0.95)	-1.15 (0.80)	-1.29 (0.78)
3	大人が自分の兄、姉を〇〇さん、〇〇ちゃん」などと名前または愛称で呼びます。	-0.46 (1.27)	-0.96 (1.10)	-0.55 (1.15)	0.04 (1.19)	0.13 (1.12)	-0.79 (1.04)	-0.03 (1.16)	0.30 (0.86)	-0.08 (1.06)	-0.10 (0.97)	-0.08 (0.76)	-0.05 (1.07)
4	自分の弟・妹を「弟・妹」と呼びます。	0.37 (1.17)	-0.04 (1.34)	0.09 (1.45)	0.48 (0.79)	0.00 (1.12)	0.49 (1.30)	0.03 (1.19)	-0.80 (1.20)	-0.04 (1.31)	-0.05 (1.28)	-0.31 (1.32)	-0.29 (1.29)
5	自分の夫を「お父さん、パパ」と呼びます。	-0.37 (1.57)	-0.74 (1.51)	0.11 (1.73)	-1.30 (0.88)	-0.38 (1.30)	-0.54 (1.32)	0.52 (0.91)	0.65 (0.67)	0.23 (0.86)	0.42 (0.84)	0.46 (0.97)	0.39 (0.95)
6	自分の配偶者の姉を「おばさん、〇〇のおばさん」などと子供の立場から呼びます。	0.40 (1.22)	0.21 (1.35)	0.85 (1.18)	-0.48 (0.99)	0.05 (0.98)	0.77 (1.00)	-0.42 (1.25)	-0.95 (0.83)	-0.04 (1.18)	-0.53 (1.31)	-0.54 (1.27)	-0.83 (1.19)

注：括弧内は標準偏差。数値は、2から-2までの変数である。網かけした部分は、呼称の使用に関してマイナス指標を示す。

第2場面は、大人が自分の親を「あなた/dangsin」¹⁰と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 $[F(1,325)=4.65, p<.05]$ に有意な主効果が見られ、日本人($M=-$

1.19)のほうが韓国人($M=-0.90$)よりも不適切であると感じていた。ここでは性差と年齢層差の主効果および交互作用は見られなかった。

第3場面は、大人が自分の兄・姉を「〇〇さん、〇〇ちゃん/〇〇ssi(氏)、〇〇a・ya(呼格助詞)」などと名前または愛称で呼ぶことについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,325)=11.35, p<.001$] に主効果が見られ、日本人($M=-0.01$)は韓国人($M=-0.43$)に比べて相対的に寛容であった。つまり、日本人は韓国人ほど強い抵抗はないようである。また、日韓差と性差 [$F(1,325)=5.47, p<.05$] および日韓差と性差と年齢層差 [$F(1,325)=3.88, p<.05$] に有意な交互作用がみられた。まず、日韓差と性差では、韓国人女性($M=-0.66$)のほうが日本人女性($M=0.06$)よりも不適切であると感じるようである。しかし、男性では、韓国人($M=-0.20$)も日本人($M=-0.07$)もさほど違いは見られなかった。日韓差と性差と年齢層差をみると、最も適切度が高かったのは日本の30歳から34歳までの女性($M=0.30$)であり、最も適切度の度合いが低かったのは韓国の30歳から34歳までの女性($M=-0.96$)であった。

第4場面は、自分の弟・妹を「弟・妹/dongsaeng」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果をみると、日韓差 [$F(1,325)=22.98, p<.0001$] と年齢層差 [$F(2,325)=4.96, p<.01$] に有意な主効果がみられた。まず、日韓差では、日本人($M=-0.27$)よりも韓国人($M=0.37$)のほうが適切であると判断する傾向がある¹⁾。また、年齢層差による多重比較の結果、最も肯定的に判断している35歳から45歳までのグループ($M=0.27$)と最も否定的に判断している30歳から34歳までのグループ($M=-0.29$)との間で有意な違いがみられた。

第5場面は、自分の夫を「お父さん、パパ/abeoji, appa」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差に主効果 [$F(1,318)=49.95, p<.0001$] がみられ、日本人($M=0.43$)に比べ、韓国人($M=-0.53$)は不適切であるという判断に傾く。また、日韓差と年齢層差に交互作用 [$F(2,318)=3.17, p<.05$] がみられた。適切度が最も高かったのは、日本人の30歳から34歳までのグループ($M=0.56$)で、最も低かったのは韓国人の25歳から29歳までのグループ($M=-0.84$)であった。韓国人の25歳から29歳までのグループは日本人の30歳から34歳までのグループよりかなり不適切であると感じるようである。

第6場面は、自分の配偶者の姉を「おばさん、〇〇のおばさん/gomo・imo, 〇〇(ui) gomo・imo」などと子供の立場から呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果では、日韓差に有意な主効果 [$F(1,324)=58.79, p<.0001$] がみられ、日本人($M=-0.73$)よりも韓国人($M=0.33$)のほうが適切であると感じる傾向が強かった。また、日韓差と年齢層差 [$F(2,324)=9.39, p<.0001$] および日韓差と性差 [$F(1,324)=4.19, p<.05$] に交互作用がみられた。まず、日韓差と年齢層差では、最も否定的であったのは日本人の35歳から45歳までのグループ($M=-0.94$)であり、最も肯定的であったのは韓国人の35歳から45歳までのグループ($M=0.80$)であった。つまり、不適切であると感じる傾向が強かった日本人の35歳から45歳までのグループに比べると、同じ年齢層の韓国人は不適切であるとは感じておらず、どちらかという適切であると感じるようである。次に、日韓差と性差では、韓国人女性($M=0.49$)は最も適切であると感じているのに対して、日本人女性($M=-0.80$)は、かなり否定的に判断しているようである。つまり、日本人

女性は韓国人女性に比べ、かなり違和感を覚えるようである。

以上の親族内での対称詞選択の適切性判断では、すべての項目で日韓差に主効果がみられた。場面1と場面3は、目上の親族に対する個人名使用に関する適切性判断である。場面1では、日本人も韓国人もかなり否定的に感じるようであるが、場面3においては、日本人も韓国人も不適切と感じてはいるが、日本人は韓国人よりもその度合いは低い。つまり、日本人は、兄・姉に対する個人名の使用を韓国人ほど強く不適切とは受け止めていないようである。また、呼称の視点移動の使用に関する適切性判断の場面5と場面6の間では、日韓に逆の結果がみられた。すなわち、場面5では、韓国人は日本人に比べると、かなり否定的に判断している。しかし、場面6では、日本人のほうが韓国人よりも否定的であった。場面1と場面2においては、日韓で適切度の度合いに差はみられたものの、日本人も韓国人も不適切であると判断している。つまり、日本人も韓国人も、目上の親族に対する個人名使用や人称代名詞の使用は、否定的に感じるようである。また、年齢層差による主効果は、場面1、場面4で有意であった。場面1では、35歳から45歳までのグループが最も否定的であったのに対し、場面4では、35歳から45歳までのグループが最も肯定的に判断していた。さらに、以上のいずれの場面でも、性差による主効果は見られなかった。ので、男女による違いはないようである。

4.2.2. 職場での対称詞選択における日韓の適切性判断の違い

職場での対称詞に関する項目については6つの場面を想定した。

第1場面は、自分の職場の社長を「○○さん/○○nim, ○○ssi (氏)」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、年齢層差と性差には主効果は見られず、日韓差 [$F(1, 326) = 5.42, p < .05$] のみに有意な主効果が見られ、韓国人($M = -1.44$)は若干であるが日本人($M = -1.19$)より不適切であると感じる傾向がみられた。またここでは、日韓差と性差 [$F(1, 326) = 6.36, p < .05$] の交互作用が見られた。職場の目上の人呼びかける際、地位・役職名ではなくその人の名前と呼びかけることについて、全てのグループの数値はマイナスであったが、相対的に見れば最も抵抗を感じるのは韓国人女性($M = -1.69$)であり、その度合いが最も低いのは、日本人女性($M = -1.15$)であるという結果が見られた。韓国人の男性($M = -1.23$)と日本人の男性($M = -1.25$)では差がほとんど見られなかった。

第2場面は、職場の上司を「あなた/dangsin」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差と年齢層差による主効果は認められず、性差 [$F(1, 324) = 12.71, p < .0001$] のみに主効果が見られた。女性($M = -1.85$)のほうが男性($M = -1.62$)より若干不適切でないと感じるようである。また、日韓差と性差 [$F(1, 324) = 3.86, p < .05$] に交互作用が見られ、全体的に不適切であると感じているが、とりわけ韓国人女性($M = -1.91$)は否定的であった。

第3場面は、会議で、男性の上司が女子社員を「○○君/○gun」と呼ぶことについての適切性判断である。上述の分散分析の結果、日韓差 [$F(1, 326) = 154.55, p < .0001$]、年齢層差 [$F(2, 326) = 3.73, p < .05$] および性差 [$F(1, 326) = 6.26, p < .05$] に有意な主効果がみられた。まず、日韓差については、韓国人($M = -1.37$)のほうが日本人($M = -0.02$)よりも、かなり不適切であると判断

している。つまり、女子社員に対する「一君」付けの呼びかけについては、日本人に比べて韓国人はかなり抵抗を感じるようである。性差では、男性($M=-0.53$)よりも女性($M=-0.82$)のほうがより不適切であると感じているようである。また、年齢層差による多重比較の結果、適切度が最も高かったのは25歳から29歳までのグループ($M=-0.48$)であり、適切度が最も低かった35歳から45歳までのグループ($M=-0.86$)との間に有意な違いがみられた。30歳から35歳までのグループ($M=-0.70$)は、ちょうど両年齢グループの間くらいであった。つまり、年齢の高い順に適切でないと感じる傾向がみられた。ここでは、有意な交互作用はすべての条件でみられなかった。

表4 日・韓の職場での対称詞使用に関する質問事項の平均と標準偏差

場面	質問項目	韓国人						日本人					
		女性			男性			女性			男性		
		25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳	25～29歳	30～34歳	35～45歳
1	自分の職場の社長を「〇〇さん」と呼びます。	-1.69 (0.68)	-1.64 (0.81)	-1.75 (0.44)	-1.17 (0.94)	-1.16 (1.05)	-1.37 (0.85)	-1.03 (1.38)	-1.20 (0.89)	-1.23 (0.82)	-1.30 (1.13)	-1.23 (1.01)	-1.24 (1.05)
2	自分の職場の上司を「あなた」と呼びます。	-1.91 (0.38)	-1.84 (0.47)	-2.00 (0.00)	-1.52 (0.73)	-1.53 (0.56)	-1.67 (0.64)	-1.82 (0.39)	-1.85 (0.37)	-1.65 (0.49)	-1.90 (0.31)	-1.54 (0.78)	-1.59 (0.71)
3	会議で、男の上司が女子社員を「〇〇君」と呼びます。	-1.29 (1.13)	-1.44 (0.71)	-1.65 (0.75)	-1.43 (0.59)	-1.39 (0.95)	-1.21 (1.06)	0.09 (1.23)	-0.35 (0.88)	-0.31 (1.23)	0.07 (0.98)	0.38 (0.96)	-0.24 (1.08)
4	職場の先輩がその人より年上の男の後輩を「〇〇君」と呼びます。	-1.20 (1.08)	-1.52 (0.71)	-1.75 (0.72)	-0.22 (0.90)	-1.37 (0.79)	-1.26 (1.16)	-0.64 (0.99)	-1.00 (0.86)	-1.15 (0.97)	-0.64 (1.00)	-1.00 (1.05)	-0.95 (0.85)
5	会議中、職場の親しい同僚を指名する時「〇〇ちゃん」と呼びます。	-1.49 (0.92)	-1.44 (0.87)	-1.80 (0.52)	-1.00 (0.95)	-1.18 (0.80)	-1.30 (0.89)	-1.85 (0.36)	-1.85 (0.37)	-1.96 (0.20)	-1.60 (0.75)	-1.38 (0.77)	-1.62 (0.62)
6	自分の職場同僚の兄・姉を「お兄さん・お姉さん」と呼びます。	0.43 (1.33)	0.28 (1.37)	0.30 (1.63)	0.04 (0.71)	-0.03 (1.26)	0.32 (1.21)	0.30 (1.21)	-0.60 (0.88)	-0.12 (1.11)	-0.30 (1.26)	-0.62 (1.19)	-0.43 (1.33)

注：括弧内は標準偏差。数値は、2から－2までの変数である。網かけした部分は、呼称の使用に関してマイナス指標を示す。

第4場面は、職場の先輩が自分より年上の男の後輩を「〇〇君/〇gun」と呼ぶことについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,326)=20.78, p<.0001$] のみに主効果が見られ、日本人($M=-0.90$)に比べて、韓国人($M=-1.35$)の適切度は有意に低かった。つまり、韓国人のほうがより不適切であると感じるようである。適切性についての男女および年齢による主効果は認められなかったが、全体的にみて、不適切であると感じているようである。

第5場面は、会議中、職場の親しい同僚を指名する時「〇〇ちゃん/〇〇a・ya」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,326)=16.73, p<.0001$] と性差 [$F(1,326)=20.95, p<.0001$] に有意な主効果が見られた。日韓差では、日本人($M=-1.73$)のほうが韓国人($M=-1.35$)よりも不適切であると感じる傾向が若干強かった。つまり、日韓いずれも不適切と感じているようであるが、韓国人よりも日本人のほうが、親しい間柄でも、フォーマルかインフォーマルかといった場面に応じて対称詞を選択するのが適切であると感じているようである。性差では、女性($M=-1.73$)よりも男性($M=-1.35$)のほうが相対的に寛容であった。

第6場面は、職場の同僚の兄・姉を「お兄さん、お姉さん/hyeong・oppa, nuna・eonni」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,326)=12.33, p<.001$] と性差 [$F(1,326)=3.88, p<.05$] の双方に有意な主効果が見られた。日韓差では、日本人($M=-$

0.24) はやや否定的に感じているのに対し、韓国人($M=0.21$)はむしろやや適切であると感じる傾向が見られた。職場の同僚の兄・姉を親族名称で呼びかけることについて韓国人は抵抗がないようである。また、性差では、女性($M=0.10$)のほうが男性($M=-0.18$)よりも若干適切であると感じるようである。

以上、職場における対称詞選択における適切性判断では、第2場面を除くすべての場面で日韓差が見られた。場面1、場面3、場面4、場面5では、適切度の度合いによる日韓差はみられたものの、日本人も韓国人も適切ではないという判断が強い点で類似している。日韓差で、最も有意に相違点がみられたのは、場面3と場面6である。まず、場面3では、韓国人は日本人に比べると女子社員に対する「一君」付けの呼び方にかなり抵抗を感じるようである。これに対し、日本では、本来、男性に対する呼び方である「一君」付けの呼称が、場合によっては女子社員を呼びかける際にも聞かれ、あまり抵抗なく、受け止められているようである。次に、場面6では、職場同僚の兄・姉に対して自分の親族のように呼びかけることについて、つまり、親族名称の虚構的用法¹²の使用範囲について日韓の間に有意な違いが見られた。韓国人は肯定的に感じるのに対して、日本人は不適切であると判断しているようである。また、性差では、場面2、場面3、場面5、場面6に有意な主効果がみられた。すべての場面で、女性よりも男性のほうがやや寛容的である結果がみられた。日韓差と性差に交互作用がみられたのは、場面1と場面2である。適切度が最も低かったのは、両場面とも韓国の女性であった。つまり、韓国人の女性が一番抵抗を感じるようである。

4.2.3. その他の場面での対称詞選択における日韓の適切性判断の違い

ここでは、親族内・職場以外の場面で、日韓で最も違いが見られると予想される5つの場面を想定し、それぞれの場面での対称詞選択における適切性判断を測定した。

第1場面は、セールスマンや運送屋の人を「会社名+さん/会社名+ssi(氏)」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,323)=138.57, p<.0001$] のみに有意な主効果がみられ、日本人($M=0.65$)に比べて、韓国人($M=-0.85$)は適切でないと感じる度合いは有意に高かった。つまり、日本人よりも韓国人のほうが抵抗を感じるようである。

第2場面は、食堂で、男の客が自分より若い従業員を「お兄さん、お姉さん/hyeong·oppa, nuna·eonni」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、有意な主効果がみられたのは日韓差 [$F(1,324)=20.30, p<.0001$] のみで、年齢層差と性差には主効果がみられなかった。日韓差をみると、日本人($M=0.21$)に比べて韓国人($M=-0.33$)の適切度は有意に低く、韓国人のほうが日本人よりも不適切であると感じるようである。

第3場面は、道で中年の女性が初対面の小学生を「お兄ちゃん、お姉ちゃん/hyeong·oppa, nuna·eonni」と呼ぶことについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1,325)=206.04, p<.0001$] および年齢層差 [$F(2,325)=3.98, p<.05$] に有意な主効果がみられた。日韓差では、日本人($M=-0.01$)と韓国人($M=-1.49$)との間にはかなり有意な差が認められ、日本人は「どちらともいえない」くらいの回答であったのに対し、韓国人はかなり適切でないと感じるようであ

表5 日・韓のその他の場面での対称詞使用に関する質問事項の平均と標準偏差

場面	質問項目	韓 国 人						日 本 人					
		女 性			男 性			女 性			男 性		
		25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 45歳
1	セールスマンや運送屋の人を「会社名など+さん」と呼びます。	-0.63 (1.44)	-0.88 (1.39)	-0.55 (1.50)	-1.35 (1.11)	-1.05 (1.06)	-0.65 (1.41)	0.94 (0.72)	0.65 (0.59)	0.58 (0.70)	0.60 (1.05)	0.46 (0.88)	0.70 (0.65)
2	食堂で、男のお客さんが自分より若い従業員を「お兄さん・お姉さん」と呼びます。	-0.14 (1.06)	-0.36 (1.29)	-0.30 (1.38)	-0.39 (1.08)	-0.35 (1.18)	-0.42 (1.14)	0.42 (0.87)	0.15 (0.88)	-0.35 (0.85)	0.50 (0.76)	0.38 (1.04)	0.17 (0.77)
3	道で、中年の女性が初対面の小学生を「お姉ちゃん・お兄ちゃん」と呼びます。	-1.51 (0.78)	-1.64 (0.76)	-1.75 (0.72)	-1.39 (0.89)	-1.11 (1.16)	-1.56 (0.88)	0.34 (0.97)	0.15 (0.67)	-0.31 (0.84)	0.05 (1.00)	-0.15 (0.69)	-1.17 (0.91)
4	道で、おじいさんが大学生を「学生・学生さん」と呼びます。	1.23 (0.81)	1.08 (1.12)	1.50 (1.24)	1.26 (0.54)	0.92 (1.17)	1.41 (1.01)	0.67 (0.74)	0.60 (0.88)	0.69 (0.68)	0.75 (0.44)	0.92 (0.64)	0.67 (0.61)
5	道で、おじいさんが初対面の男性を「先生」と呼びます。	0.80 (0.93)	0.44 (1.36)	0.09 (1.21)	0.39 (0.94)	0.61 (1.05)	1.05 (0.95)	-1.18 (0.77)	-1.21 (0.79)	-1.50 (0.91)	-1.45 (0.83)	-1.54 (0.66)	-1.21 (0.92)

注：括弧内は標準偏差。数値は、2から－2までの変数である。網かけした部分は、呼称の使用に関してマイナス指標を示す。

る。また、年齢層差では、若干の差ではあるが、35歳から45歳までのグループ($M = -1.95$)が最も不適切であると感じるようである。30歳から34歳までのグループ($M = -0.69$)と25歳から29歳までのグループ($M = -0.63$)ではほぼ同じぐらいであった。また、日韓差と性差に有意な交互作用がみられた [$F(1, 325) = 4.46, p < .05$]。適切度が最も高かったのは日本人女性($M = 0.06$)であり、最も低かったのは韓国人女性($M = -1.63$)であった。日本人女性に比べて、韓国人の女性はかなり違和感を覚えるようである。

第4場面は、道で、おじいさんが大学生を「学生・学生さん/haksaeng」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果、日韓差 [$F(1, 326) = 21.81, p < .0001$] のみに主効果が見られ、日本人も韓国人も適切であると感じるが、日本人($M = 0.72$)よりも韓国人 ($M = 1.19$)のほうが適切度は有意に高かった。

第5場面は、道でおじいさんが初対面の男性を「先生/seonsaeng, seonsaengnim」と呼びかけることについての適切性判断である。分散分析の結果をみると、日韓差 [$F(1, 325) = 333.33, p < .0001$] に主効果が見られ、日本人($M = -1.35$)は不適切であると判断しているのに対して、韓国人 ($M = 0.70$)は適切であると感じるようである。つまり、見知らない人に対する「先生」という呼び方は、韓国人に比べて日本人にはかなり抵抗があるといえる。

以上の5つの場面では、日韓差が一貫してみられた。場面1、場面2、場面3の場合、韓国人には否定的に受け止められた呼称が、日本人の間では若干の差は見られたものの、韓国人に比べると適切であると感じられるようである。特に、場面1については、日本人はかなり肯定的であった。場面2と場面3は、親族外の年下に対する親族名称使用の適切性判断であった。韓国人は日本人に比べ、親族外の年下に対する親族名称使用にはかなり否定的に受け止めているようである。また、場面4では、度合いの差はあるとしても、日本人も韓国人も違和感がないようである。場面5では、日本人と韓国人との間でかなりの違いがみられた。初対面の中年男性に対する「先生」という呼称は、韓国人にとってはあまり抵抗なく受け止められているのに対し、日本人はかなり抵抗があるようである。また、場面3では年齢層差による主効果がみられた。最も否定的であっ

たのは、35歳から45歳までのグループであった。しかし、男女差による主効果はいずれの場面でも見られなかった。以上の場面では、性差による影響はないようである。また、場面3では日韓差と性差に交互作用がみられた。小学生を「お姉ちゃん・お兄ちゃん」と呼びかけることについて、韓国人の女性は日本人の女性に比べて、かなり抵抗を感じるようである。

5. 総合考察

5.1. 自称詞使用についての適切性判断

日本人および韓国人の自称詞使用に対する適切度をグラフ化して示すと図1のとおりである。図1のすべての場面で、日本人と韓国人の間に、自称詞使用の適切さの判断に違いがみられた。具体的にみると、自分を名前や地位・役職名で言及したり、目上に対し「おれ/na」などといった同等または目下に対する人称代名詞を自称詞として用いることについては、日本人も韓国人も不適切に判断している点で一致している。理由としては、まず日韓両言語における使い分けのルールの類似性が考えられる。子供が聞き手の場合、日本語では「お医者さんのほうを見てね」などと自分を役職名で言及したり、下位者が上位者に対して自らを名前で呼ぶことは可能である。しかし、その場に子供が含まれない場合は代名詞を用いるのが一般的である(岡本, 2000)。これは韓国語にもそのまま当てはめることができる。また、両言語における待遇表現は、目上の人に対しては、敬度の高い人称代名詞を用いる点で類似している。従って、適切度による違いはあるものの、日本人も韓国人も不適切であると判断するのであろう。しかし、中年男性が自分を「おじさん・おじちゃん/ajeossi」と言及する場面を除けば、全体的に日本人の方が韓国人よりも一層否定的であり、とりわけ自分を名前で言うことについては日韓の差が大きい。

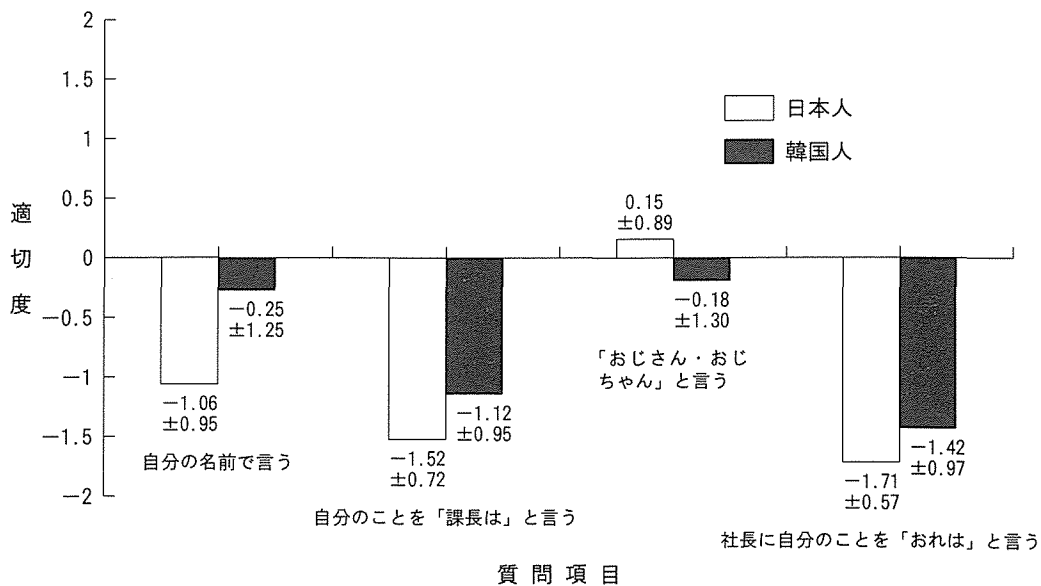


図1 日本人および韓国人の自称詞の使用に対する適切度
注：±は標準偏差。適切度は、2から-2までの変数。

親族外の人間関係において親族名称を対称詞として用いる頻度は日本人よりも韓国人のほうが多いという報告がある(林, 2001)。そのため、親族名称を自称詞で用いた場合でも、日本人よりは違和感を感じないであろうと予想される。しかし本研究では、中年の男性が自分のことを「おじさん、おじちゃん/ajeossi」と親族名称で呼ぶことについて、日本人はやや肯定的に判断しているのに対し、韓国人はやや否定的であるという結果であった。親族名称の虚構的用法において、日本語の場合は、年齢階梯語として用いられる傾向が強く、韓国語の場合は親しい人や親しくなりたい人に対し、親族の関係を想定して使うのが一般的である。しかし、韓国語における「ajeossi」は、現在では20代から60代に至るまで、日常生活で接するほとんどの成人男性に対して用いることができるため、親しみを込めるという本来の意味は失われ、見知らぬ人に対して用いられる傾向がある(林, 1998)。そのため、韓国人は「ajeossi」を自称詞として用いることについて抵抗感を感じるのであろう。

また、以上の場面で男女差の主効果がみられたのは、自分を名前で言及する場面と、地位・役職名で言及する場面の2つである。全体的にみると、女性のほうが男性と比べてやや否定的に受け止めており、呼称の使い分けに敏感である。また、年齢層差は全ての場面で見られず、自称詞使用の適切性判断については年齢層差の影響は認められなかった。

5.2. 対称詞使用についての適切性判断

5.2.1. 親族内

親族内での対称詞使用に関する日本人と韓国人の適切度をグラフ化して示すと図2に示したとおりである。6つのすべての場面で日韓差がみられた。

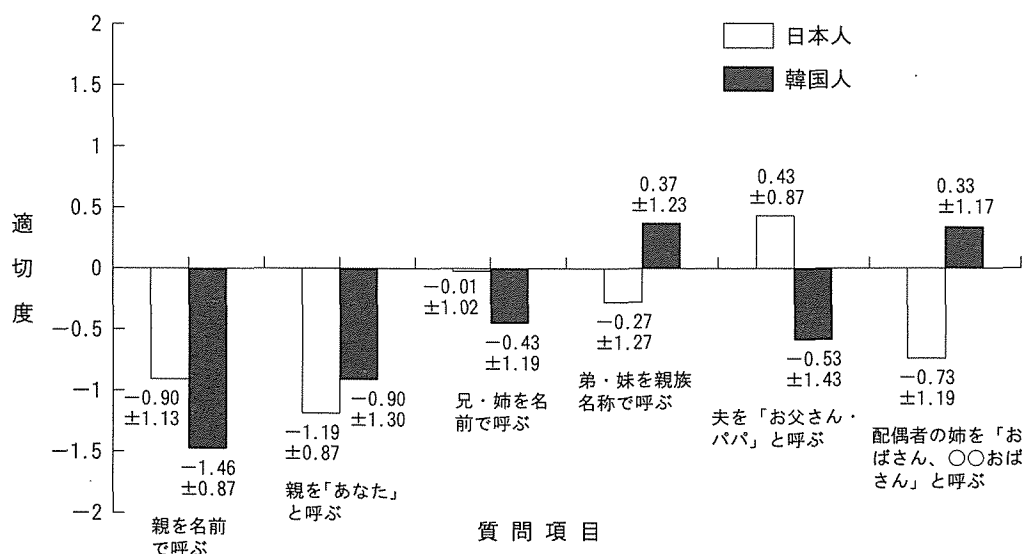


図2 親族内での対称詞使用に関する日本人および韓国人の適切度

注：±は標準偏差。適切度は、2から-2までの変数。

自分の両親を「〇〇さん、〇〇ちゃん/〇〇 nim, 〇〇 ssi」などといった相手の名前や「あなた/dangsin」といった人称代名詞などで呼びかけることに対して、日本人も韓国人も不適切であると判断している。これは、鈴木(1973)の「目上の親族に対しては名前、人称代名詞で呼ぶことはできない」という原則にしたがっていると言えよう。ただし、名前と人称代名詞使用の適切性判断の度合いにおいては日本人と韓国人とで違いが見られた。まず、親に対して名前で呼びかけることについては、韓国人のほうが日本人よりも不適切であると感じる傾向が一層強い。その理由として、韓国語の場合、日本語の「-さん」のように同等から比較的目上に対してまで幅広く使われる敬称がないことが考えられる。一方、親を「あなた/dangsin」で呼びかけることについては、韓国人よりも日本人のほうがより否定的である。韓国語の「dangsin」は、指称（言及語）としては目上の人に対して使われることもあるため、韓国人は日本人よりはやや寛容的に判断していたのかもしれない。ところで、この鈴木の実験原則は、兄・姉に対する場合、日本語において少し拘束が弱いことが実態調査(洪, 1997; 荻野, 1998; 林, 2001)でも指摘されている。これは、本研究の適切性判断においても同じ傾向がみられた。すなわち、日本人の場合、兄・姉に対する名前の使用は、親に対する場合に比べて、非常に寛容である。韓国語についても同じ傾向が見られた。つまり、韓国人は親や兄・姉を名前で呼ぶことについて日本人よりも否定的に判断しているが、2つの場面の比較で言えば、兄・姉に対する名前使用は親に対する場合に比べて、不適切と感じる度合いはかなり下がる。

弟・妹に対する親族名称使用と、夫を「お父さん、パパ/abeoji, appa」と呼んだり、配偶者の姉を「おばさん、〇〇のおばさん/gomo・imo, 〇〇 (ui) gomo・imo」などで呼ぶといったテクノニミー使用において、日本人と韓国人とで大きな違いが見られた。この理由として、日本語と韓国語の社会的背景・呼称体系の違いが考えられる。まず、弟・妹を親族名称で呼びかけることに関して、日本人は否定的であるのに対し、韓国人は肯定的に受け止めている。既述したように、韓国語の場合、弟や妹が成人したり子供が生まれると、彼らを尊重する気持ちを表すため、名前で呼びかけることを避け、本来なら呼称として使われない親族名称を用いる。これに対し、日本語の場合は、弟や妹が成人した場合にも名前で呼び続けるのが一般的である。また、子供を起点としたテクノニミーの使用においても、日本語と韓国語ではその使い方が異なっている。日本語のテクノニミーにおいては、「～の」という焦点となる人間の所有格が省略される(原, 1979)点に特徴があり、夫を「お父さん、パパ」と呼ぶことができるのは、呼称表現において子供に自己を同一化する(鈴木, 1973)ことであると解釈できる。一方、韓国語の場合は、子供の名前を省略しないのが普通である。従って、「〇〇 (ui) abeoji/appa」という形式で「〇〇のお父さん」とか「〇〇のパパ」という表現に限定されることになる。さらに、韓国語においてこのようなテクノニミーが用いられるのは、既述したように、成人したり、結婚して子供がいる弟・妹のように名前で呼びにくい相手や、姻族のように心理的距離がある関係の場合である。日本語では、姻族に対しては親族名称や名前が用いられる。つまり、日本語では子供の名前が省略されるが、韓国語では子供の名前が省略されないという違いがあると同時に、日本語では子供に心理的に同一化して用いる呼び方であるが、韓国語では直接呼ぶことを避けるために用いる間接的呼び方であるという違

いがある。このような事情によって、本研究で明らかになったように、夫を「お父さん、パパ/abeoji, appa」と呼んだり、配偶者の姉を「おばさん、〇〇のおばさん/gomo・imo, 〇〇 (ui) gomo・imo」などで呼ぶといったテクノニミーの使い分けに関する適切性の判断も、日本人と韓国人とで異なっていたのであろう。

また、年齢層差は親を名前で呼ぶ場合のみに主効果が有意であり、年齢が上であるほど否定的に判断している傾向がみられた。親を名前で呼びかけることについては、年齢の上の人ほど抵抗を感じるようである。また親族内の対称詞では、すべての場面において性差による影響は見られなかった。

5.2.2. 職場

職場での対称詞使用に関する日韓の適切度をグラフ化して示すと図3のとおりである。同僚の兄・姉を「お兄さん・お姉さん」と親族名称で呼びかける場面を除く全ての場面で日韓ともかなり否定的に判断している。しかし、その適切度の度合いにおいては日韓差が見られた。同僚の兄・姉を「お兄さん、お姉さん/hyeong・oppa, nuna・eonni」などと親族名称で呼びかけることに対し、韓国人はやや肯定的な判断で、不適切であると判断していない。一方、日本人はやや否定的であった。このような違いの背景には、日本人と韓国人の非親族に対する意識の違いがあると考えられる。韓国語における非親族に対する親族名称の使用は、相手と擬似親族関係を想定することで、親しい関係を表していると考えられる。また、年上に対しては名前で呼びにくいいため、それを避けるために親族名称を使用し、円滑なコミュニケーションを営もうとする戦略であるといえる。これに対し、日本語では、相手と擬似親族関係を想定せず、むしろ親族名称を相手が属する世代語、すなわち年齢階梯語として用いる傾向が強く、使われる頻度は韓国語より低い(林, 2001)。そのため、「お兄さん、お姉さん」という呼称は、日本語では職場においては馴染まないであろう。

女子社員に対する「一君/一gun」付けの呼び方に関して、韓国人はかなり抵抗があるようであるが、日本人は韓国人に比べて寛容である。韓国語の「一gun」と日本語の「一君」は同じ「君」の漢字を語源とする。しかし、韓国語では、「一gun」の使用範囲が男性に対してに限られているが、現在日本語では「一君」を女性に対して用いることもできる。この点で両言語は異なっており、日本語の方がより広範囲に使用されている。そのため、日本語の「一君」は女性に対して使用されてもあまり抵抗はないが、韓国語の「一gun」は否定的な感じを持つのであろう。ただし、日本の職場における敬語の調査(国立国語研究所, 1982)によると、女性の事務員に対する「一君」づけの呼び方は避けられる傾向があるようである。これは本研究で「一君」付けの呼び方が肯定的には判断されなかった($M = -0.02$)ことも合致する。

親族内での目上に対する対称詞選択と同様に、目上である社長を「〇〇さん/〇〇nim, 〇〇ssi (氏)」と相手の名前で呼びかけることに対し、日韓ともに不適切であると判断している。ただ、適切度においては日本人よりも韓国人のほうが低かった。さらに、目上である上司に対して「あなた/dangsin」といった人称代名詞で呼びかけることについても、日韓ともに不適切であると判断

している点で類似している。これらは、先生や会社の上役に対しては地位名称で呼ぶのが多く、名前だけや人称代名詞で呼ばないのが一般的であるとする日本語における鈴木(1973)の原則に従っており、これは韓国語にもそのまま当てはめることができるという林(1998)の指摘とも重なるものである。ただ、上下関係を意識せずに本音で自由に議論しやすくするというねらいで、職場によっては上司を「名前+さん」で呼ぶことを勧める「さん付け運動」を積極的に取り組んでいるところもあるようである(渡辺, 1998)。このような働きかけは、韓国のある大企業で実施されている、職階名ではなくお互いを名前で呼ぼうという「名前+ssi/nim付け運動」にもみられる¹³。今後、このような運動の波及が、日本人と韓国人の適切性判断にどのように現れるか興味深い。

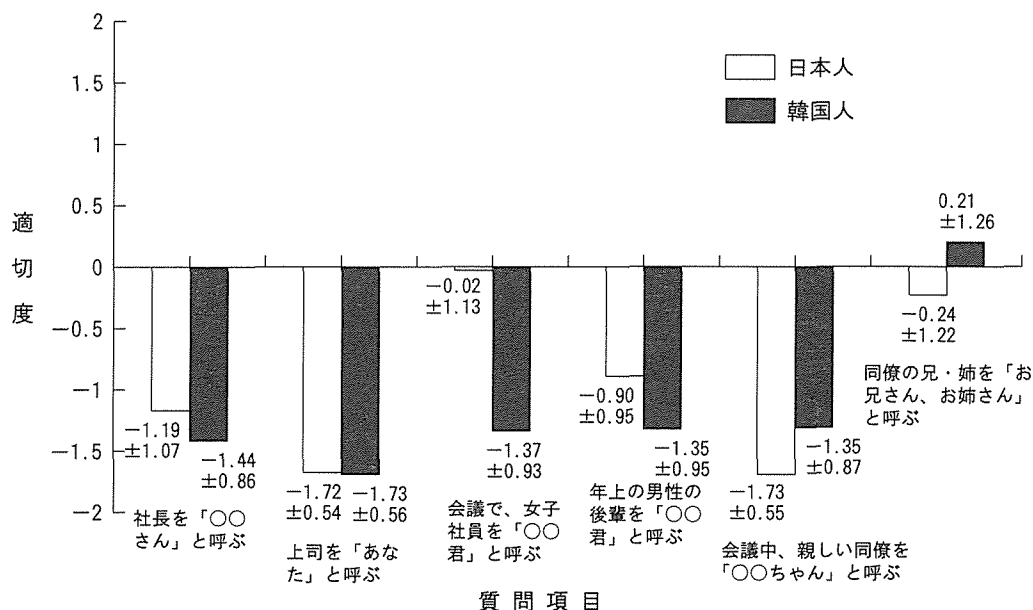


図3 職場での対称詞使用に関する日本人および韓国人の適切度
注：±は標準偏差。適切度は、2から-2までの変数。

年上の後輩を「-君/-gun」付けで呼びかけることについては、日本人も韓国人も不適切であると判断していた。これは、日韓では地位差による上下よりも年齢差の上下をより重視していることを示唆しているのではなからうか。しかし、適切度の観点からとらえると、日本人よりも韓国人のほうがより否定的に傾いており、日本人よりも韓国人のほうがより年齢差を重視する傾向があると言えよう。これは、荻野・金・梅田・羅・盧(1990)の指摘¹⁴とも重なると言えよう。また、会議中、親しい同僚を「○○ちゃん/○○a・ya」と呼びかけることに関して、つまり、フォーマルな場面で、インフォーマルな場面での呼称が用いられることについては日韓ともに不適切であると判断している。これは日本語と韓国語の言語社会では、同じ相手であってもその場の状況に応じて呼称を変えるスタイル・シフトが要求されることを示唆している。

また、男女間に有意差があったすべての場面で、女性よりも男性のほうがやや寛容であるとい

う結果が見られ、女性のほうが呼称の使い分けにやや敏感であることが分かった。また、年齢差が見られたのは、女子社員に対する「一君」付けの場面であるが、年齢が高い順により抵抗感をもつ傾向がみられた。

5.2.3. その他の場面

親族間と職場以外における日本人と韓国人の対称詞の使用に関する適切度は図4に示したとおりである。図4のすべての場面で日韓差がみられた。

まず、取引会社の社員に対し、相手をその人の個人名ではなく、「相手の会社名+さん」と呼びかけることについて、日本人と韓国人とでは大きな違いが見られた。日本語では、家に対する帰属意識が強く、「苗字+さん」という表現が多用される傾向がある(林, 2001)。日本語で帰属集団の名称を使うことは、個人に対する苗字の使用ばかりでなく、その人が属している会社名の使用にまで拡大されている。しかし、韓国語の場合は、相手を相手の帰属している会社名でとらえることは稀であり、その人の個人名を使うのが一般的である。そのため、適切性の判断に日本人と韓国人で大きな違いが見られたのであろう。また、食堂の若い従業員および小学生を親族名称でよびかけることに関しても日韓で違いが見られた。日本人に比べて、韓国人は食堂の若い従業員および小学生を親族名称で呼びかけることに対して否定的であることが分かった。とりわけ、小学生に対する親族名称の使用に関してはかなり抵抗感をもつようである。

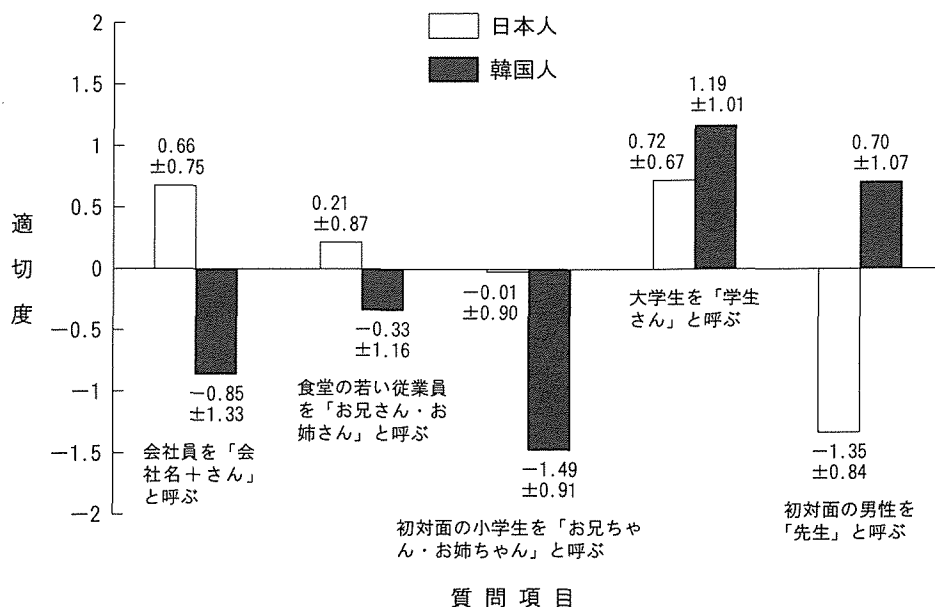


図4 その他の場面での対称詞使用に関する日本人および韓国人の適切度

注：±は標準偏差。適切度は、2から-2までの変数。

非親族に親族名称を用いる動機は、いずれの社会・文化にあっても、自分と他人を「近づける」

ことにある(原, 1979)。食堂で若い従業員に対しては「お兄さん、お姉さん」と呼ぶことは、年齢階梯語として用いることで、相手と自分の相対的地位および相手と第三者の相対的地位に関係なく、話しかけられた相手の性・年齢からくる絶対的特徴に応じて用いられる親族名称である。しかし、韓国の兄弟姉妹語である兄を意味する「hyeong・oppa」と姉を意味する「nuna・eonni」は、話し手の年齢が聞き手の年齢よりも低く、年齢的に下から上に対してのみ用いられるのが一般的である。そのため、年下の小学生を「お兄ちゃん、お姉ちゃん/hyeong・oppa, nuna・eonni」と呼ぶことは、この原則に反しており、抵抗があったのであろう。

ところで、大学生に対して「学生・学生さん」と呼びかけることについては、日本人も韓国人も肯定的に感じるようである。しかし、見知らぬ中年の男性を「先生」と呼びかけることに関しては、日韓で大きな違いがあった。金田一・柴田・山田・山田(1989)によると、「先生」は、「指導者として自分が教えを受ける人。狭義では教育家・医師を指し、広義では芸術家や芸道の師匠・議員などをも含む」としている。これは韓国語における先生の意味と同じである。しかし、本調査の適切性判断でも明らかになったように、韓国語においては見知らぬ中年男性に対しても使用でき¹⁵、日本語での使用とは異なっている。この理由から、「先生」の対称詞としての使用の適切性に日韓で大きな違いがみられたのであろう。

以上のすべての場面において、性差の主効果は見られなかった。また、年齢層差については小学生を「お姉ちゃん・お兄ちゃん」と呼びかけることに関してのみ主効果がみられ、最も否定的であったのは、35歳から45歳までのグループであった。ここでは、日韓と年齢層差の交互作用は認められず、日本人と韓国人とも年齢の上のグループほど抵抗を感じるようである。

6. まとめ

日本語と韓国語の呼称の用い方は、その社会的・文化的背景からかなり類似しているのではないかと予想された。しかし、本研究により、類似性と共に、微妙な違いあるいは大きな違いがみられる対話場面が見いだせた。以下に、呼称選択の違いについて主なものを要約する。

第1に、兄や姉に対して名前を使用することに関して韓国人は日本人と比べてかなり否定的に判断している。しかし、親に対する名前の使用に比べると寛容的であった。第2に、配偶者の親族にテクノミーを用いることについて、日本人は抵抗を感じるのに対し、韓国人は寛容であった。子供の名前で呼ぶテクノミーの使用においては、日本語では、子供の名前が省略されるが、韓国語では省略されない傾向がある。そのため、日本語では、夫を「お父さん」とか「パパ」とか呼ぶことに、また韓国語では「〇〇のお父さん」という意味での「〇〇(ui) abeoji」と呼ぶことに馴染みがある。第3に、親族名称の虚構的用法において、年下の人、とりわけ初対面の小学生を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼ぶことに対して、韓国人は日本人に比べるとかなり抵抗を感じている。第4に、両言語の「一君」と「先生」は同じ漢字を起源とするが、「一君」と「先生」の使用においての日韓差は呼びかける相手が誰かによって、適切性に違いが見られた。すなわち、女性に対する「一君」の使用について、日本人は寛容であるが、韓国人はかなり抵抗を感じていた。初対面の男性に対する「先生」に関しては、日本人の場合は抵抗を感じるが、韓国人には肯

定的に受け止められる。第5に、年齢層差と男女差が、いくつかの場面で統計的に有意であった。目上の人を名前や人称代名詞で呼びかける場合など、両言語における呼称の使い分けの特徴と規則性からやや不適切であると考えられそうな項目に関して、年下より年上ほど、また男性より女性のほうがやや不適切であると感じる傾向が強く、呼称の使い分けに敏感であることがわかった。

注

- 1 会社の上司および教師に対しては役職名や「先生」で呼ぶが、代名詞や姓（〇〇さん）では呼びにくい。学校の先輩にも「あなた」は使いにくいし、「〇〇さん」と呼ぶのも不適切と感じる人がある（岡本，2000）。ただし、国立国語研究所(1982)の行った調査では、上位者のうち部長・課長には、「部長」「課長」などと職階名で呼びかけるのが最も多かったが、主任以下の上位者には、その姓に「さん」を添えて呼びかけるのが最も多く、職階名で呼びかけるのはきわめて少ないと報告している。つまり、目上であっても相手によっては職階名を用いず、「姓+さん」で呼びかけることもあるようである。
- 2 テクノニミー (teknonymy) は、一般に子供本位の呼称のことをいう。その代表的な型は、ある人を呼ぶときに、その人自身の個人名、通常の親族呼称で呼ぶのではなく、その人の子や孫のなかの一人の個人名にもとづいて、「だれそれのお父さん（もしくはお母さん）」とか、「だれそれのおじいさん（またはおばあさん）」と呼ぶ方式である（石川・梅棹・大林・蒲生・佐々木・祖父江，2000）。ちなみに韓国の学者이(1997)は、「従子名制（子の名前に従って呼称が決まるの意）」と訳してこの語を用いている。
- 3 しかし、原(1979)は、日本語のテクノニミー (teknonymy) の特徴を子供の名前の省略であるとしながらも、聞き手の年齢が幼少の場合は、「相手にわかりやすい話し方」をするために、「よっちゃんのパパ」と言う場合もあるとしている。
- 4 ただし、相手が妻や目下の親族の場合は、親族名称を省略し、「子供の名前+a・ya」と呼びかけることもある。なお、/a/は名前が子音で終わったとき用いる呼格助詞で、/ya/は名前が母音で終わった時に用いる呼格助詞である。
- 5 被験者の数が少なかった35歳から45歳までは、5歳刻みにせず10歳刻みを一つのグループとした。
- 6 Fは、分散分析のF値を示し、pは有意確率を示す。有意確率が、5%以下($p<.05$)である場合に、分析対象となっている変数が、測定した現象に対して、影響していることを意味している。
- 7 ただし、本質問紙では、「〇〇」が示すものが、姓か名前か、また、想定する人物の性別を明確にしていなかったため、被験者の解釈の違いによる結果への影響があった可能性は排除できない。なお、場面3においても、誰に対してなのかという想定が結果に影響した可能性はある。
- 8 渡辺(1978)によると、日本語では祖父・祖母、おじ・おば、兄・姉、娘を意味する個人親族名称を、それぞれ老人の男・女、中年の男・女、若い男・女、若い女を意味する年齢階梯語としても使っている。
- 9 日本語の「おれ」と韓国語における「na」は、いずれも対等で親しい関係や目下の人の前で使う表現であり、向上きの待遇意識は含まれていない点で対応関係をなしている。
- 10 国語審議会の建議『これからの敬語』(1952)のなかでは、「あなた」は、人を指すことばの標準形とすると記している。しかし、近年、目上の相手に対して「あなた」を使うことに対して違和感があることが指摘されている。日本語の「あなた」の用法に似ている韓国語としては「dangsin」があるが、徐(1989)は、「あなた」と「dangsin」の対応関係について、いずれも尊敬度が非常に低

いこと、年下または部下、同年配、若干の年上（5歳位の違い）や身分的に同じレベルの人などにしか用いることができないこと、また、夫婦間でよく使われていることばである点をあげている。

- 11 この場面は、例えば直接弟に対し「弟」と呼びかけるときを想定した。しかし、被験者によっては、他の人に向かって「ぼくの弟は～」と言う場面であると理解して回答した可能性があり、それが本結果に影響している可能性は排除できない。
- 12 親族名称の虚構的用法について、鈴木(1973)は、「実際には血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼びかけることを、人類学では親族名称の虚構的用法 (fictive use) と称している。虚構的用法の一般原則は、話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称詞または自称詞に選ぶのである」(p.158-159) と記述している。
- 13 2000年4月13日付け「한겨레21, 303 (インターネット)」の「호칭이 파괴된다 (呼称が「破壊」されている)」による。
- 14 日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法についてアンケートを行った荻野・金・梅田・羅・盧の調査(1990)によると、韓国側は年齢差をより重視し、日本側は社会的役割や親疎関係をより重視するという点に最も大きな違いがあると指摘している。
- 15 朴(1989)は、「本来、先生は教師、師匠を意味することばで相手への極尊称として用いられた。しかし、現在の韓国語ではその意味が下落し、男性に対する敬称としても用いられている」(p.21) と指摘している。

引用文献

- 岡本 真一郎 (2000) 『ことばの社会心理学』ナカニシヤ出版
- 荻野 綱男 (1998) 「大都市居住者の対人関係と敬語行動」『日本語学』17 (11), 160-167.
- 荻野 綱男・金 東俊・梅田 博之・羅 聖淑・盧 顕松 (1990) 「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」『朝鮮学報』136, 1-51.
- 金田一 京助・柴田 武・山田 明雄・山田 忠雄 編集 (1989) 『新明解国語辞典 (第4版)』三省堂
- 国語審議会 (1952) 『これからの敬語』文部省
- 国立国語研究所 (1982) 『国立国語研究所報告73-企業の中の敬語』三省堂
- 鈴木 孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
- 原 忠彦 (1979) 「親族名称」原忠彦・末成道男・清水昭俊 (編) 『ふおるく叢書9-仲間』253-308, 弘文堂
- 石川 栄吉・梅棹 忠夫・大林 太良・蒲生 正男・佐々木 高明・祖父江 孝男 (2000) 『(縮刷版) 文化人類学事典』500-501, 弘文堂
- 任 榮哲・井出 里咲子 (2000) 「ことばと文化の日韓比較: 「君 (クン)」 と 「군 (クン)」」『月刊言語』29 (7), 98-103, 大修館書店
- 林 炫情 (1998) 『日本語と韓国語における呼称語の比較-自称詞と対称詞を中心に-』広島大学大学院国際協力研究科修士論文
- 林 炫情 (2001) 「韓国語と日本語における呼称の対照研究序論」『国際協力研究誌 (広島大学大学院国際協力研究科紀要)』7 (1), 107-121.
- 渡辺 友左 (1978) 「親族語彙の全国概観」日本方言研究会・柴田武 (編) 『日本方言の語彙』27-42, 三省堂

- 渡辺 友左 (1998) 「呼称という論点」『日本語学』17 (8), 4-11, 明治書院
- 朴 甲洙 (1989) 「国語呼称의 実状과 対策」『국어생활』19, 10-32, 국어연구소
- 徐 正洙 (1989) 『존대법 연구』한신문화사
- 이 광규 (1997) 『韓國人類學叢書 9－韓國親族의 社會人類學』265-311, 집문당
- 장 용걸 (1997) 「한일 친족명칭의 비교고찰: 종자명호칭의 구조와 사회적의미를 중심으로 학생생활연구」15, 209-225.
- 洪 珉杓 (1997) 「韓日兩國呼稱의 社會言語學的 考察——大學生들의 呼稱使用을 中心으로」『日語日文學研究』30, 481-505.
- Lee, K.K. & Harvey, Y. K. (1973). Teknonymy and Geononymy in Korean Kinship Terminology. *Ethnology*, 12, 31-46.

質問文一覧

あなたは以下の場面での呼称使用は適切であると思いますか、思いませんか。それぞれの場面における呼称使用について、あてはまるもの【「(1)全く適切でない」「(2)あまり適切でない」「(3)どちらともいえない」「(4)ある程度適切である」「(5)非常に適切である」】に○を付けてください。なお、文の中で「○○」とあるのは名前を直接呼ぶことを表しています。つまり、「○○さん」は名前をさん付けで呼ぶことを意味します。

1. 会議で、男の上司が女子社員を「○○君」と呼びます。
2. 職場の先輩がその人より年上の男の後輩を「○○君」と呼びます。
3. 自分の職場の同僚の兄・姉を「お兄さん・お姉さん」と呼びます。
4. 自分の職場の同僚を「あなた」と呼びます。
5. 会議中、職場の親しい同僚を指名する時「○○ちゃん」と呼びます。
6. 自分の職場の社長を「○○さん」と呼びます。
7. 大人が自分の親を「○○さん、○○ちゃん」などと名前または愛称で呼びます。
8. 大人が自分のことを「○○は」など、自分の名前で言います。
9. 中年のおじさんが自分のことを「おじさん・おじちゃん」と言います。
10. 食堂で、男のお客さんが自分より若い従業員を「お兄さん・お姉さん」と呼びます。
11. 道で、中年の女性が初対面の小学生を「お姉ちゃん・お兄ちゃん」と呼びます。
12. セールスマンや運送屋の人を「会社名など+さん」と呼びます。
13. 大人が自分の兄、姉を「○○さん、○○ちゃん」などと名前または愛称で呼びます。
14. 会社の課長が部下に自分のことを「課長は」と言います。
15. 自分の会社の社長に自分のことを「おれは」と言います。
16. 大人が自分の親を「あなた」と呼びます。
17. 道で、おじいさんが大学生を「学生・学生さん」と呼びます。
18. 自分の弟・妹を「弟・妹」と呼びます。
19. 自分の夫を「お父さん、パパ」と呼びます。
20. 道で、おじいさんが初対面の男性を「先生」と呼びます。
21. 自分の配偶者の姉を「おばさん、○○のおばさん」などと子供の立場から呼びます。

(投稿受理日：2001年6月1日)

(改稿受理日：2002年2月7日)

林 炫情 (いむ ひょんじょん)

広島大学大学院国際協力研究科

739-8529 広島県東広島市鏡山1丁目5番1号 広島大学大学院国際協力研究科

0824-24-6905 lim@hiroshima-u.ac.jp

玉岡 賀津雄 (たまおか かつお)

広島大学留学生センター

739-8523 広島県東広島市鏡山1丁目1番1号 留学生センター

0824-24-6288 ktamaoka@hiroshima-u.ac.jp

深見 兼孝 (ふかみ かねたか)

広島大学留学生センター

739-8523 広島県東広島市鏡山1丁目1番1号 留学生センター

0824-24-6282 khukami@hiroshima-u.ac.jp

The degree of appropriateness of the use of address terms in Japanese and Korean

LIM Hyunjung, TAMAOKA Katsuo, and FUKAMI Kanetaka
Hiroshima University, Japan

Keywords

address terms, appropriateness, seniority, teknonymy, Japanese and Korean

Abstract

The present study investigated similarities and differences in appropriateness of the address terms used in the Japanese and Korean languages. A total of 338 office workers (154 Japanese from the Hiroshima area of Japan and 184 Koreans from the Seoul area of Korea) were asked to judge address terms in terms of the degree of appropriateness for 21 different situations, utilizing a 5-point scale from 5 (very appropriate) to 1 (inappropriate).

The study showed the following interesting results. Seniority strongly influences the selection of address terms in both languages. However, Japanese were less strict in calling elder brothers and sisters by their own names than Koreans. In the case of teknonymy, that is, taking the child's point of view, differences in Japanese and Koreans appeared depending on whom they talk to. When speaking of a child's parent, Koreans strongly prefer to use the child's name: *Yeongsu-eomma* (Yeongsu's mother). In contrast, Japanese feel it appropriate to simply say father or mother: *otoosan* (father) or *okaasan* (mother). The Japanese words *oniityan* (elder brother) or *oneetyan* (elder sister) are used in reference to juniors and children, while in Korean these words are preferred to be used only in reference to older people. Although *-kun* (both languages) and *sensei* (Japanese) / *seonseng* (Korean) have the same origin, *-kun* was preferred to be used in a wider range of situations by Japanese than Koreans, whereas *sensei/seonseng* was preferred to be used in a wider range by Koreans than Japanese.

As such, the present study demonstrated various subtle differences in appropriateness of address terms used in the Japanese and Korean languages.